

本願にあら行なれば、たへたらんにしたがひて、たもたせたまふべく候。けうようの行も佛の本願にあらず。たへんにしたがひて、つとめさせおはしますべく候」(熊谷直実入道蓮生へつかはす御返事・昭法全五三五頁)とあって、世間的な倫理にも十分配慮している。

(43) 登山状(昭法全四二六頁)

(44) 常に仰せられける御詞(昭法全四九二頁)

(45) つねに仰せられける御詞(昭法全四九二頁)、また『無量壽経釈』に「今生にいかなる福あつてか、この大願に値へる。たとひ遇ふといへども、もし信ぜずは値はざるが如し。既に深くこれを信ず。今正しくこれに値ふなり。但したとひ心にこれを信ずといへども、もしこれを行ぜずは、また信ぜざるが如し」とある(昭法全七五頁)。

また「罪八十悪・五逆ノモノムマルト信ジテ、少罪ヲモオカサジトオモフベシ。罪人ナホムマル、イハムヤ善人ヲヤ。行ハ一念・十念ムナシカラズト信ジテ、無間ニ修スベシ」(一紙小消息・昭法全五〇〇頁)

(46) 禅勝房伝説の詞(昭法全四六一頁)

(47) 登山状(昭法全四二七頁)

(48) 禅勝房伝説の詞(昭法全四六四頁)

(49) 乘願上人伝説の詞(昭法全四六七頁)

(50) 常に仰せられける御詞(昭法全四九〇頁)

(51) 御消息(昭法全五七七頁)

(52) 一枚起請文(昭法全四一六頁)

(53) 御消息(昭法全五八一頁)

(54) 大胡太郎実秀へつかはす御返事(昭法全五一九頁)

(55) 禅勝房伝説の詞(昭法全四六一頁)

(56) 念仏大意(昭法全四一四頁)

(57) 禅勝房伝説の詞(昭法全四六四頁)

(58) 三部経大意(昭法全三十頁)

(59) 禅勝房伝説の詞(昭法全四六一頁)、念仏の相続によって心に歡喜

踊躍が起きることについては清水澄教授の「法然上人の人間観―歡喜踊躍の心をめぐって―」『法然仏教の研究』所収に詳細されている。

(60) 示或人詞(昭法全五八九頁)

(61) つねに仰せられける御詞(昭法全四九五頁)、念仏相続の具体的な生活のあり方としては「現世をすくへき様は念仏の申されん様にすくへし。念仏のさまたけになりぬへくはなになりともよろつをいとひすて、これをと、むへし。いはくひしりて申されすはめをまうけて申すへし。妻をまうけて申されすはひしりにて申すへし。住所にて申されすは流行して申すへし。流行して申されすは家にて申すへし。自力の衣食にて申されすは、他人にたすけられて申すへし。他人にたすけられて申すへし。一人して申されすは同朋とともに申すへし。共行して申されすは一人籠居して申すへし」(禅勝房伝説の詞・昭法全四六二―四六三頁)とあり、生活第一の生き方ではなく、念仏を中心とした生き方の中に生活されることを論じており、現代のものの豊かさを追う生活第一主義的あり方が批判され、その上で心のあり方(念仏の生活)を第一とするところに人間としての真実の姿が描かれている。

なお、念仏の生活を第一にすることは、具体的には「念仏住生義」に「又世間のいとなみひまなければこそ、念仏の行をは修すへけれ」(昭法全・六九〇頁)とあるように、時間をつくり出してでも念仏するという生き方である。

- (11) 百四十五箇条問答(昭法全六六二頁)。「念仏住生義」に「又念仏すれども、心の猛利ならざる事は、末世の凡夫のなれるくせ也」(昭法全・六八九頁)とある。
- (12) 十二箇条の問答(昭法全六七六頁)
- (13) 土川本選択集六十一頁
- (14) 要義問答(昭法全六一九頁)
- (15) 念仏住生要義抄(昭法全六八三頁)
- (16) 浄土宗略抄(昭法全六〇一頁)
- (17) 念仏住生要義抄(昭法全六八二―六八三頁)、他力の用例については、藤堂恭俊博士の「法然上人の遺文にみられる他力の用語例とその内容の解明」に詳述されている。
- (18) 念仏住生要義抄(昭法全六八二―六八三頁)
- (19) 念仏住生要義抄(昭法全六八二―六八三頁)
- (20) 逆修説法五七日(昭法全二六六頁)
- (21) 示或人詞(昭法全五八八頁)
- (22) 土川本選択集第七章五十七―五十八頁、また選択集第二章では五番の相對の親疎對を説明するのに親縁をもつてしている。
- (23) 土川本選択集第三章三十一頁。
- (24) 土川本選択集第十章私積段八八頁。
- (25) 土川本選択集第七章私積段五九頁、念仏が多善根であることについて『選択集第十三章私積段に、竜舒の浄土文を引いて論じている(土川本一四―一五頁)。また聞経と称名との滅罪の多少不同について述べ、念仏が散心を損し重罪を滅するという。念仏の功德、特に現世利益については深貝慈孝教授の「法然上人と『観念法門』」特に現世利益について「『法然上人研究』所収を参照されたい。
- (26) 逆修説法三七日(昭法全二四六―二四七頁)、『選択集第七章』では、阿弥陀仏の光明が念仏行者のみを撰取することを明かしている(土川本五七、六〇頁)
- (27) 十二箇条の問答(昭法全六七四―六七五頁)
- (28) 土川本選択集第十一章私積段九十一頁、『観無量壽經釈』に「其中に念佛は是れ即ち勝行なるが故に、芬陀利を引きて以て其の喩となす」(昭法全二二六頁)とあり、念仏の殊勝であることを「念佛をば金にたとへたる事にて候。金は火にやくにもいろまさり、みづにいろにも損ぜず候。かやうに念仏は妄念のおこる時申候へどもけがれず、物を申しまするにもまぎれ候はず、そのよしを御心えながら、御念仏の程はこと事ませずして、こし念佛のかずをそへんとおぼしめさんは、さにて候。(往生浄土用心・昭法全五六〇頁)とある。又、念仏を薬に喩えることについては、「念仏住生義」(昭法全・六八九頁)にもある。
- (29) 浄土宗略抄(昭法全五九六―五九七頁)
- (30) 要義問答(昭法全六三〇―六三一頁)
- (31) 要義問答(昭法全六三一頁)
- (32) 浄土宗略抄(昭法全六〇五頁)
- (33) 土川本選択集第三章三十四頁。
- (34) 逆修説法・一七日(昭法全二三四頁)
- (35) 往生浄土用心(昭法全五六三―五六四頁)
- (36) 浄土宗略抄(昭法全五九六―五九七頁)
- (37) 逆修説法一七日(昭法全二三五頁)
- (38) 十二箇条の問答(昭法全六七三頁)。「三部経大意」に臨終來迎の意味を述べ、三種の愛心を滅することと、正念に住せしめることに言及している(昭法全・三三二頁)。
- (39) 念仏住生要義抄(昭法全六八五頁)
- (40) 三心料簡および御法語(昭法全四五〇頁)、「それに善人は善人ながら念佛し、悪人は悪人ながら念佛して、ただ生まれつきのままにて念佛する人を、念佛にすけささぬとは申す也」(禪勝房伝説の詞・昭法全四六二頁)とある。
- (41) 七箇条の起請文(昭法全八〇八―八〇九頁)
- (42) 往生大要抄(昭法全五三三頁)、あるいは「されば持戒の行は、佛の

には「佛語称勅、其有得聞彼佛名号、歡喜踊躍乃至一念、当知、此人為得大利、即是具足無上功德ト云ヘリ。此經ヲ弥勒菩薩ニ付属シ給ニハ乃至一念スルヲモチテ大利無上ノ功德ト云ヘリ。經ノ大意此文明ナル者カ⁽⁵⁸⁾」とあり、禪勝房に伝えられた法語には「今度の生に念佛して来迎にあづからんうれしさよとおもひて、誦躍歡喜の心のおこりたらん人は、自然に三心は具足したりと知るべし⁽⁵⁹⁾」とあって、阿弥陀仏の臨終での来迎を確信し、この度の生で六道輪廻を離れ、浄土に往生できる実感が念仏者の心のうちに充滿することとなる。このように煩惱具足の凡夫も乱想の凡夫も質的に轉換し、往生したる心持ちとなり、今の生そのものが充実したものとなり、そのことがさらに阿弥陀仏への信を深めることとなる。阿弥陀仏への信、すなわち信法の深まりが先に述べたように信機の深まりでもあることから、我助け給えという心持ちになっていくのである。法然自ら「五逆十悪の罪人の、臨終の一念十念によりて来迎にあつかる事は、そのつみをくいかなしみて、たすけおはしませとおもひて念佛すれば、阿陀如来願力をおこして罪を滅し、来迎します也⁽⁶⁰⁾」と語らせ、また「いけば念佛の功つもあり、しならば浄土へまいりなん。とてまかくても此身には、思ひわづらふ事ぞなきと思ぬれば死生ともにわづらひなし⁽⁶¹⁾」と言わしめるのである。

おわりに

罪悪生死・乱想の凡夫なればこそ、自力を捨てて阿弥陀仏の本願

の聖意を憑みとして、本願業力に乗じて、口に南無阿弥陀仏と称えることを通して、浄土往生の決定の信が確立され、阿弥陀仏の来迎を得て浄土に往生する。口称念仏の実践は平生の念仏者を内的に変成させ、臨終においても正念に住せしめることになる。

法然のこうした立場は自らの念仏体験にも裏打ちされている。現実に口称念仏の相続によって、思い煩うことのない人生を送ることができるとともに、浄土を欣慕する気持ちへと轉換して行くことになる。それはどこまでも阿弥陀仏への絶対的な依憑の精神状況であり、その心に阿弥陀仏の働きを信受されるのである。このことが凡夫の変成を成り立たせ、ひいては念仏者のあるべき態度を作り上げてくるのである。

注

- (1) 「法然浄土教における念仏信仰の内実」(『法然上人研究二所収』)
- (2) 拙稿「信機と信法」(『佛敎大学文学部論集第八十一号所収』)に凡夫として自覚規定した内容を列挙しているので参照されたい。
- (3) 拙稿「信機と信法」(『佛敎大学文学部論集第八十一号所収』)。拙稿「法然上人における深心について」(『佛敎大学文学部論集第八〇号所収』)
- (4) つねに仰せられる御詞(昭法全四九四頁)
- (5) 明遍僧都との問答(昭法全三九三頁)
- (6) 大胡の太郎実秀へつかはす御返事(昭法全五二五頁)
- (7) 往生浄土用心(昭法全五六二頁)
- (8) 念仏往生要義抄(昭法全六八四頁)
- (9) 百四十五箇条問答(昭法全六四九頁)
- (10) 百四十五箇条問答(昭法全六五八頁)

をや。行は一念十念むなしからずと信じて、無間に修すべし。一念なをむまる、いかにいはんや多念をや⁽⁴⁵⁾といった立場を堅持して、多念に修し、無間に修することを教えている。

そして自己の心の有り様は自らが知り得ているものであるために、自己の心に問えと言う。「又いはく、往生の得否はわが心にうらなへ、その占の様は、念佛だにもひまなく申されば往生は決定としれ⁽⁴⁶⁾」と自覚を促している。決定往生の可否は、阿弥陀仏の本願を疑わないという立場に立つて、すなわち深心をはじめ三心具足することを説くとともに、三心の具足は念仏の相続によつてなされることするのである。

したがつて、決定往生の信と念仏を称えるという行の相続、行の相応を求めて次のように述べている。

信を一念にむまるととりて、行をは一形にはげむへしとすむる也⁽⁴⁷⁾

又云、一念十念にて往生すといへはとて、念佛を疎相に申せは、信か行をさまたくる也。念々不捨といへはとて、一念十念を不定におもへは、行か信をさまたくる也。かるかゆへに信をは一念にむまるととりて、一形はけむへし⁽⁴⁸⁾

又人目をかざらずして、往生の業を相続すれば、自然に三心は具足する也。たとへば葦のしげいけに、十五夜の月のやどりたりとも見えねども、よくよくたちよりて見れば、あしまをわけてやどる也。妄念のあしはしげれども、三心の月はやどる也⁽⁴⁹⁾

名号をきくといふとも、信ぜずば聞ざるが如し。たとへ信ずと云

とも、唱へずば信ぜざるが如し。ただつねに念佛すべしと⁽⁵⁰⁾

浄土に往生せんとおもはん人は、安心起行と申て、心と行との相応すへき也⁽⁵¹⁾

このように浄土往生を願う者は信行相応させて、決定往生の心で、口に南無阿弥陀仏と称えることを臨終に至るまで相続して、念仏以外の余行を交えず、ただ念仏を申すといった態度が要求されてくる。こうしたことに触れる法語には以下のものがある。

ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがひなく往生するぞとおもひとりて、申すほかには別の子細候はず⁽⁵²⁾

心に往生せんとおもひて、口に南無阿弥陀仏をとへば、声につきて決定往生のおもひをすべし。その決定の心によりて、すなはち往生の業はさだまる也⁽⁵³⁾

タタクチニ南無阿弥陀仏トトナエハ、コエニツキテ決定往生ノオモヒヲナスヘシ。ソノ決定心ヲスナワチ深心トナツク。ソノ信心ヲ具シヌレハ、決定シテ往生スル也⁽⁵⁴⁾

念佛の相続せられん人は、われ三心具したりとしるべし⁽⁵⁵⁾

返返モ、一向専修ノ念佛ニ信ヲイタシテ、他ノココロナク、日夜朝暮、行住座臥ニ、オコタル事ナク称念スヘキ也⁽⁵⁶⁾

一向専修の念佛者になる日よりして、臨終の時にいたるまで申たる一期の念佛をとりあつめて、一度の往生はかならずする事也。又云、念佛申す機は、生まれつきのままにて申す也⁽⁵⁷⁾

こうした決定往生の信に基づく口称念仏の相続は念仏者の心のうちに、往生の確信による喜びを生じさせることになる。『三部経大意』

三、念仏者の態度

先に述べたように、法然においての念仏は乱想のままに称える念仏であり、観念の念仏ではない。今のままで、すなわちあるがままの状態で念仏せよと説くのである。『念仏往生要義抄』には「およそ阿弥陀佛の本願ともうす事は、やうもなくわが心をすませともならず、不浄の身をきよめよともならず」といい、『三心料簡および御法語』の善悪の機の事には、「念佛申さむ者は、ただ生れつきのままにて申へし。善人は善人ながら、悪人は悪人ながら、本のままにて申すへし。此の念仏に入るの故に、始めて持戒破戒なにくれと云べからず。ただ本体ありのままにて申すべしと云々」と述べられるのである。こうした立場は凡夫の現実の有り様を踏まえた立場へと展開する。例えば「すへてもろもろの煩惱のおこる事は、みなもと貪瞋を母として出生するなり。貪といふについて喜足小欲の貪あり、不喜足大欲の貪あり、いま浄土宗に制するところは、不喜足大欲の貪煩惱也。まつ行者かやうの道理を心えて念佛すべき也。これか真実の念仏にてある也。喜足小欲の貪はくるしからず。瞋煩惱も啓上慈下の心をやぶらすして、道理を心えほとく也。癡煩惱といふは、おろかなる心なり。この心をかしくなすへき也。まつ生死をいとひ浄土をねかひて、往生を大事といとなみて、もろもろの家業を事とせざれば、癡煩惱なき也。少々の癡は往生のさわりにはならず」、あるいは善導の説く至誠心を解釈して「それに強盛のこ

ころをおこさずば、至誠心かけて、ながく往生すべからずと心えて、みだりに身をもくだし、あまつさえ人をもかろしむる人々の不便におぼゆる也。さらなり強盛の心のおこらんはめでたき事なり。善導の十徳の中に、はじめの至誠念佛の徳をいだすにも、一心に念佛してちからのつくるにあらざればやまず、乃至寒冷にもあせをながす、この相状をもて至誠をあらはすなどあるなれば、たれたれもさこそはげむべけれ、ただしこの定なるをのみ至誠心と心えて、これにたがはんをば、至誠心かけたりといはんには、善導のごとく至誠心至極して、勇猛ならん人ばかりぞ往生はとぐべき。われらがごときの怯弱の心にては、いかが往生すべきと臆せられぬべき也。かれは別して善導一人の徳をほむるにてこそあれ、これは通じて一切衆生の往生を決するにあれば、たくらぶべくもなき事也。所詮はただわれらごときの凡夫、をのをの分につけて、強弱真実の心をおこすを、至誠心となづけたること、善導の釈の心は見えたれ」といふ解釈にも見ることがができる。しかし、現実の凡夫の有り様に照らして説くといえども、罪を犯してよいという立場ではない。「ただし五逆をつくりて十念をとなへよ、十悪をおかして一念を申せとすむるにはあらず。…分にしたかひて悪業をととめよ、縁に触れて念佛を行し往生を期すへし」といい、「罪は五逆もさはり無と知とも、構て小罪をもつくらじと思ふべし。往生は一念に足ぬと存ずとも、多念を重ねんと思ふべし。信をば一念に往生すと取て、行をば多念にはげむべしと云々」とあり、また「又云。罪は十悪五逆のもの、なをむまると信じて、小罪をもをかさじと思ふべし。いかにいはんや善人

阿弥陀ほとけの御ちからにてのそかせ給ひ候へく候。諸邪業繫無能礙者たのもしくおほしめすべく候。又後世者とおほしき人の申けに候は、まつ正念に住して念佛申さん時に、佛来迎し給ふへしと申けに候へとも、小阿弥陀経には、與諸聖衆現在其前、是人終時心不顛倒、即得往生、阿弥陀佛、極楽国土と候へは、人のいのちおはらんとする時、阿弥陀ほとけ聖衆とともに、目のまへにきたり給ひたらんを、まつ見まいらせてのちに、心は顛倒せずして、極楽にむまるへしとこそ心えて候へ。されはかるきやまひをせはや、善知識にあはやといのらせ給はんいとまにて、いま一返も、やまひなき時念佛申して、臨終には阿弥陀ほとけの来迎にあつかりて、三種の愛心をのそき、正念になされまいらせて、極楽にむまれんとおほしめすべく候⁽³⁵⁾がある。

さらに臨終の正念については、行者の念仏による正念によつて阿弥陀仏が来迎するといった考え方を否定して、「又まめやかに往生の心さしありて、弥陀の本願をたのみて念佛申さん人、臨終のわろき事は何事にかあるへき。そのゆへは、佛の来迎し給あゆへは、行者の臨終正念のため也。それを心えぬ人は、みなわか臨終正念にて申したらんおりそ、ほとけはむかへ給ふへきとのみ心えたるは、佛の本願を信せず、経の文を心えぬ也。称讚浄土経には、慈悲をもてくわへたすけて、心をしてみたらしめ給はすととかれたる也。ただの時よくよく申しおきたる念佛によりて、かならずほとけは来迎し給ふ也。佛のきたりて給へるを見て、正念には住すと申すへき也。それにさきの念佛をはむなく思ひなして、よしなき臨終正念をの

みいのる人のおほくある、ゆゆしき僻胤の事也。されは佛の本願を信せん人は、かねて臨終をうたかふ心あるへからず。常時申さん念佛をそ、いよいよ心を至して申へき⁽³⁶⁾といい、正念に住するのは阿弥陀仏の来迎によるものであるとし、その阿弥陀仏の来迎なるがゆえに魔による障礙はなくなるとするのである。第十九願の来迎引接はまさしく魔の対治のためであり、「次に魔事を対治せんがために来迎すとは、道盛りなりと申して、佛道修行するには、必ず魔の障礙相い副うなり。：いかにいわんや凡夫具縛の行者、設い往生の行業を修すと雖も、魔の障礙を対治せずば、往生の素懷を遂げんこと難からん。しかるに阿弥陀如来、無数の化佛・菩薩聖衆に困遶せられ、光明赫奕として行者の前に現じたもう時には、魔王もこれに近づき、これを障礙することあたわず。しかれば則ち来迎引接は魔障を対治せんがためなり。来迎の義略を存するにかくの如し⁽³⁷⁾」と述べられるところであり、そのことは『十二箇条の問答』に「臨終の時もろもろの聖衆とともにきたりて、かならず迎接し給ふゆへに、悪業としてさふるものなく、魔縁としてさまざまくる事なし⁽³⁸⁾」と述べられていふことから理解される。

このように口称念仏による変成は阿弥陀仏の本願業力の働きとし念仏者のうえに現成してくるのである。それはどこまでも念仏者の度量や力によるものではなく、阿弥陀仏からの働きとし、念仏者の在り方・生きざまとして現れるのである。それでは法然は念仏者の態度についてどのように規定することになるのであろうか。

について、「問、一切ノ善根魔王ノタメニサマタケラル、コレハイカカシテ対治シ候ヘキ。答、魔界トイフモノハ、衆生ヲタフロカスモノナリ。一切ノ行業ハ、自力ヲタノムカユエ也。念佛ノ行者ハ、ミオハ罪悪生死ノ凡夫トオモヘハ、自力ヲタノム事ナクシテ、タタ弥陀ノ願力ニノリテ往生セムトネカフニ、魔縁タヨリヲウル事ナシ。観慧ヲコラス人ニモ、ナオ空界ノ魔事アリトイフ。弥陀ノ一事ニハ、モトヨリ魔事ナシ、観人清浄ナルカユエニトイヘリ。佛ヲタフロカス魔縁ナケレハ、念佛ノモノオハサマタクヘカラス」(30)、「問、阿弥陀佛ヲ念スルニ、イカハカリノ罪ヲカ減シ候。答、一念ニヨク八十億劫ノ生死ノ罪ヲ減シトイヒ、マタ但聞佛名ニ菩薩名、除無量劫生死之罪ナト申候ソカシ」(31)といつて、魔にたぶらかされることなく、無量劫の罪を減するとする。さらに病について転重軽受を説いて、「又佛のちからは、念佛を信するものを、転重軽受といひて、宿業かきりありて、おもくうくへきやまひを、かろくうけさせ給ふ。いはんや非業をはらひ給はん事ましまさらんや。されは念佛を信する人は、たとひいかなるやまひをうくれとも、みなこれ宿業也。これよりもおもくこそうくへきに、ほとけの御ちからにて、これほともうくるなりとこそは申す事なれ」(32)と述べている。

こうした念仏による諸々の変成を『選択集』私釈段では法照禪師の『浄土五会念仏略法事讚』の「かの佛の因中に引誓を立てたまへり。名を聞きて我を念せば惣て迎へに来たらむ。貧窮と富貴とう簡ばず、下智と高才とを簡ばず、破戒にして罪根の深きをも簡ばず、ただ心を廻して多く念佛せば、よく瓦礫をして変じて金となさしめ

む」を引いて論証としている(33)。

次に臨終に際しての変成についてながめてみたい。特に臨終における正念に關することと境界愛、自体愛、当生愛の滅について述べるところを引き出せば次のものがある。

「其来迎引接願者、即此四十八願中第十九願也。人師釈之有多義。先為臨終正念来迎。所謂疾苦遍身将欲死之時、必起境界自體當生三種愛心也。而阿弥陀如来放大光明現行者前時、未曾有事故歸敬心外無他念。而亡三種愛心更無起。且又佛、近行者加持護念故也。称讚淨土經說慈悲加祐令心不乱。既捨命已、即得往生住不退轉、阿弥陀經說阿弥陀佛與諸聖衆現在其前、是人終時不轉倒、即得往生阿弥陀佛極樂国土。令心不乱與心不轉倒、即令住正念之義也」(34)とあり、同様なものに「又かろきやまひをせんといのり候はん事も、心かしくは候へとも、やまひもせてしに候人も、うるはしくおはる時には、断末魔のくるしみとて、八萬の塵勞門より、無量のやまひ身をせめ候事、百千のほこつるきにて、身をきりさくかことして、みんとおもふ物をもみす、舌のねすくみて、いはんとおもふ事もいはれず候也。これは人間の八苦のうちの死苦にて候へは、本願信して往生ねかひ候はん行者も、この苦はのかれすとて、悶絶し候とも、いきのたえん時は、阿弥陀ほとけのちからにて、正念になりて往生をし候へし。臨終はかみすちきるかほとこの事にて候へは、よそにて凡夫さためかたく候。たた佛と行者との心にてしるへく候也。そのうえ三種の愛心おこり候ひぬれば、魔縁たよりをえて、正念をうしなひ候也。この愛心をは善知識のちからはかりにてはのそきかたく候。

細明者可有多種⁽²⁶⁾」

と述べ、阿弥陀仏の常光はすべての国土を照らし、神通光は念仏の衆生を攝取して捨てない働きをするともに、阿弥陀仏の十二光をとりあげ、そのなか、清浄光は無貪善根によつて生じた光であるために、念仏する衆生の貪欲の罪（淫貪の財貪の二貪）を除き、無戒破壊の罪を滅して、持戒清浄の人へと変成させるのである。また歡喜光に照らされる念仏者は瞋恚の罪を滅して忍辱の人と同じくなることを明かしている。さらに智慧光に照らされる念仏者は愚癡の煩惱に覆われていても愚癡が滅して智者と勝劣がなくなるというのである。

また濁れる心を清浄にすることについて「浄摩尼珠といふ珠を、にごれる水に投ぐれば、珠の用力にて、その水きよくなるがごとし。衆生の心はつねに名利にそみて、にごれる事かの水のごとくなれども、念佛の摩尼珠を投ぐれば、心のみずをのづからきよくなりて、往生をうる事は念佛のちから也⁽²⁷⁾」と、念仏を浄摩尼珠に譬え、また念仏を靈藥府臟、阿弥陀葉に譬えて『選択集』第十一章私釈段では「問うて曰く、既に念佛をもつて上々と名づけば、何が故ぞ、上々品の中に説かずして、下々品に至つて、しかも念佛を説くや。答へて曰く、……ただ念佛の力のみあつて、よく重罪を滅するに堪へたり。故に極悪最上の法を説くところなり。例するに、かの無明淵源の病は、中道府藏の藥にあらずば、即ち治することあたはざるが如し。今この五逆の重病の淵源は、またこの念佛の靈藥府藏なり。この藥にあらずば、何ぞこの病を治せむ。……問うて曰く、もししからば下

品上生は、これ十悪輕罪の人なり。何が故ぞ念佛を説くや。答へて曰く、念佛三昧は、重罪なほ滅す、いかにいはんや、經罪をや。余行はしからず。或いは輕を滅して、重を滅せざるあり。或いは一を消して、二を消さざるあり。念佛はしからず、輕重兼ね滅す、譬えば阿伽陀藥の、遍く一切の病を治するが如し。故に念佛をもつて、王三昧とす。……念佛はかくの如き等の現当二世、始終の兩益あり。まさに知るべし⁽²⁸⁾」と述べて、念仏は輕重共に罪を滅することを明らかにしている。そして現当三世の益であり始終の兩益であるとする。

さらに『浄土宗略抄』では「又善導の往生礼讚に問ていはく、阿弥陀佛を称念禮觀するに、現世にいかなる功德利益かある。こたへていはく、阿弥陀佛をとふる事一声すれば、すなはち八十億劫の重罪を除滅す。又十往生經にいはいはく、もし衆生ありて、阿弥陀佛を念して往生を願ふものは、かのほとけすなはち二十五の菩薩をつかはして、行者を護念し念ふに、もしは行もしは坐、もしは住もしは臥、もしはよるもしはひる、一切の時、一切のところに、悪鬼惡神をしてそのたよりをえしめ給はずと。又觀經にいふときは、阿弥陀佛を称念して、かのくに往生せんとおもへば、かの佛すなはち無數の化佛、無數の化觀音勢至菩薩をつかはして、行者を護念し給ふ。さきの二十五の菩薩の、百重千重に行者を圍繞して、行住坐臥をとはず、一切の時処に、もしはひるもしはよる、つねに行者をはなれ給はずと。弥陀を念して往生せんとおもふものは、つねに六方恆沙等の諸佛のために護念せらる⁽²⁹⁾」と述べて、重罪の滅と行者の護念にふれている。また魔の対治と一念に八十億劫の罪を滅すること

るにあたはず。しかりといへども、今試みに二義をもって、これを解せむ。一には勝劣の義、二には難易の義。初めに勝劣とは、念仏はこれ勝なり。余行はこれ劣なり。ゆえ何となれば、名号はこれ万徳の帰するところなり。しかれば則ち弥陀一佛の所有の四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功德、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功德、皆ごとく阿弥陀佛の名号の中に撰在す。故に名号の功德は最も勝とするなり。余行はしからず、おのおの一隅を守る。これをもって劣とするなり。∴しかれば則ち佛の名号の功德は、余の一切の功德に勝れたり。故に劣を捨てて勝を取って、もって本願としたまふか⁽²³⁾とのべて、阿弥陀佛の聖意を勝劣・難易の二点から論じて、その上で名号万徳所帰の解釈をしている。さらに「佛名是一。即能撰散以住心。復教令正念称名⁽²⁴⁾」といい、念仏の功德を種々説いている。また念仏の利益について「次に念佛利益について七あり。一には滅罪生善、二には冥得護持、三には現身見佛、四には当来勝利、五には弥陀別益、六には引例勸信、七には悪趣利益なり」の七種あげている。念仏は大利益であり、多善根であり、阿弥陀佛の本願の行であるがゆえに衆行と比べて全く勝るものであることを論じるとともに、阿弥陀佛の光明が念仏するものを照撰することを明かしている⁽²⁵⁾。

このように仏と凡夫が三縁の関係で、称名念仏を媒介として念仏の利益功德が働きかつ阿弥陀佛の光明にてらされるといふ構図を見いだすことができる。この念仏を通した阿弥陀佛の光明が凡夫を質的に転換させるのである。散乱する心を正念にし、染汚な心を清浄

な心へと転換させるのである。こうした働きは現世と臨終とにわたって細かに述べられている。

はじめに現世における口称念仏による阿弥陀佛の光明によって変成されることについて『逆修説法』では常光と神通光の二種をあげて「此阿弥陀佛常光、於八方上下無央数諸佛国土無所不照。八方上下付極樂指方角也。就此常光有異説。則平等覺經別指頭光、觀經惣云身光。異説往生要集勸此、可見矣。常光者長照不斷照光也。次神通光者、是別別照光也。如釈迦如来欲説法華經之時照東方八千土者、則神通光也。阿弥陀佛神通光者、撰取不捨光明也。有念佛衆生之時照、無念佛衆生之時無照故也。

次清浄光者、人師釈云。無貪善根所生光也。云々。貪有二、淫貪財貪也。清浄者、非但除却汗穢不浄、斷除其二貪也。貪名不浄故也。若約戒者、當不淫戒不慳貪戒。然者法藏比丘昔不淫不慳貪所生光故、觸此光者滅貪欲之罪。若有人貪欲盛雖不得持不淫不貪戒、至心專念此阿弥陀佛名号者、即彼佛方無貪清浄之光照觸撰取故、除淫貪財貪之不浄、滅無戒破戒之罪、成無貪善根身、均持戒清浄人也。

次歡喜光者、此は無瞋善根所生光也。久持不瞋恚戒得此光故云無瞋所生光。觸此光者滅瞋恚罪。然者雖瞋增盛人、專修念佛者、以彼歡喜光撰取故、瞋恚罪滅同忍辱人。是亦如前清浄光滅貪欲罪矣。

次智恵光者、此は無癡善根所生光也。久修一切智恵、斷盡愚癡之煩惱得此光故、云無癡所生光。此光亦滅愚癡之罪。然者雖無智念佛者、照彼智恵光撰取故、即滅愚癡、與智者無有勝劣。又如此光可知。如是而雖有十二光名、取要在斯。大方彼佛光明之功德中、備如是義。

らざるなり。ただ他力の往生なり。本より佛の定め置きたもう名号を唱えば、ないし十声・一声にても生ぜしめ給えば、十声・一声念佛して一定往生すべけんこそ、その願成就し成佛し給うと云う道理は候え。しかればただ一向に、佛の願力を仰ぎて往生をば決定すべきなり。我が自力の強弱をもって、定とも不定とも思ふべからず⁽²⁰⁾と述べて、凡夫の自力の強弱を基準として往生の可否を云々することを戒めている。他力の念仏でなければ往生は不可能であり、往生は阿弥陀仏の本願業力によるものであることを説くのである。

二、仏と凡夫の関係と念仏による変成

自力による往生は不可能であり、他力の念仏による往生を説く法然は、阿弥陀仏と凡夫との関係を、阿弥陀仏の念仏行者への対応として「善導和尚の往生礼讚に、本願をひきていはく、若我成佛、十方衆生、称我名号、下至十声、若不生者、不取正覚。彼佛今現在世成佛、當知、本誓重願不虛、衆生称念必得往生。この文をつねに、くちにもとなへ、心にもうかへ、眼にもあてて、弥陀の本願を決定成就して、極楽世界を莊嚴したてて、御目を見まはして、わか名をとなふる人やあると御らんし、御みみをかたふけて、わか名を称する物やあると、よるひるきこしめさるる也。されは一称も一念も阿弥陀にしられまいらせすといふ事なし。されは撰取の光明はわか身をすて給ふ事なく、臨終の来迎はむなしき事なき也。この文は四十八願のまなこ也、肝なり、神也⁽²¹⁾」といい、凡夫の三業と仏の三業が

対応していることを善導の説く三縁の解釈を引用して、観經の真身觀文の「光明遍照十方世界念佛衆生撰取不捨」を説明する中で、「問うて曰く、つぶさに衆行を修して、ただよく回向すれば、皆往生を得。何をもちてか、佛の光普く照らすにただ念佛者を撰する。何の意かあるや。答えて曰く、これに三義あり。一に親縁を明かす。衆生、行を起して口に常に佛を称すれば、佛即ちこれを見たまふ。身に常に佛を礼敬すれば、佛即ちこれを見たまふ。心に常に佛を念ずれば、佛即ちこれを知りたまふ。衆生、佛を憶念すれば、佛また衆生を憶念したまふ。彼此の三業相ひ捨離せず。故に親縁と名づくるなり。二に近縁を明かす。衆生、佛を見むと願すれば、佛即ち念に應じて、現に目の前に在します。故に近縁と名づくるなり。三に増上縁を明かす。衆生称念すれば、即ち多劫の罪を除いて、命終らむと欲する時、佛、聖衆とともに自ら来たりて迎接したまふ。もろもろの邪業繫、よく礙ふるものなし。故に増上縁と名づくるなり。自余の衆行は、これ善と名づくといへども、もし念佛に比ぶれば、全く比較にあらず⁽²²⁾と述べて、称名勝行説を展開し、仏と衆生との三業が相即関係にあることを論じているのである。

こうした阿弥陀仏と凡夫との関係のうえに、念仏の功德が働くことになる。念仏に阿弥陀佛のすべての徳が撰在していることを『撰集』第三章で「問うて曰く、普く諸願に約して、麁悪を選び捨てて善妙を選び取ることは、その理しかるべし。何が故ぞ、第十八願に一切の諸行を選び捨て、ただ偏に念仏の一行を選び取つて、往生の本願としたまふや。答へて曰く、聖意測り難し、たやすく解す

善義の文「貪・瞋・邪偽・奸詐・百端にして、悪性侵め難く、事蛇蝎に同じきは、三業を起といえども、名づけて雑毒の善とし、また虚假の行と名づけ、真実の行と名づけざるなり。もしかくのごときの安心起行を作す者は、たとい身心を苦励して、日夜十二時急に走り急に作すこと、頭燃を灸うごとくなるも、すべて雑毒の善と名づく。この雑毒の行を廻して、かの佛の浄土に生ぜんことを求めんと欲する者は、これ必ず不可なり」⁽¹³⁾を引用しており、凡夫の行為のすべてが雑毒の善であることを受け止めたうえで、凡夫の浄土への往生はいかにして可能となるかを論じている。

凡夫の行為自体が本質的に雑毒の善であれば、雑毒の善なる行を根拠として浄土への往生はもとより不可能である。不可能であるからこそ、自力による往生は不可とされ、阿弥陀仏の本願業力による他力でなければ往生できないとするのである。『要義問答』に「ワカチカラニテ生死ヲハナレム事、ハケミカタクシテ、ヒトヘニ他力ノ弥陀ノ本願ヲタノム也」⁽¹⁴⁾とあるのがそれである。自力による往生は困難であることを所々に説き明かし、自力について「問ていはく、自力といふはいかん。答ていはく、煩惱具足してわろき身をもて、煩惱を断じ、さとりをあらはして成佛すと心えて、昼夜にはげめども、無始より貪瞋具足の身なるがゆえに、ながく煩惱を断ずる事かたきなり。かく断じがたき無明煩惱を三毒具足の心にて断ぜんとする事、たとへば須弥を針にてくさき、大海を芥子のひさくにてくみつくさんごとし。たとひはりにて須弥をくさき、芥子のひさくにて大海をくみつくすとも、われらが悪業煩惱の心にては、曠劫多生を

ふとも、ほとけにならん事かたし。その故は、念々歩々におもひと思ふ事は、三途八難の業、ねてもさめても案じと案ずる事は、六趣四生のきづな也。かかる身にては、いかでか修行学道をして成佛はすべきや。これを自力とは申す也」⁽¹⁵⁾と述べている。自力の否定を通して絶対他力の念仏行が勧められているのである。

『浄土宗略抄』には「たた極楽に往生せんとおもはは、一向に称名の正定業を修すへき也。これすなはち弥陀の本願の行なるかゆへに、われらか自力にてはなれぬへくは、かならずしも本願の行にかきるへからすといへとも、他力によらずは往生をとけかたきかゆへに、弥陀の本願のちからをかりて、一向に名号をとなへよと、善導はすすめ給へる也。自力といは、わかちからをはけみて往生をもとむる也。他力といは、佛のちからをたのみたてまつる也」⁽¹⁶⁾といひ、他力を規定して「又おほき石をふねにいれつれば、時のほどにむかひのきしにとづくがごとし。またくこれは石のちからにあらず。ふねのちからなり。それがやうに、われらがちからにてはなし、阿弥陀ほとけの御ちから也。これすなはち他力なり」⁽¹⁷⁾、「ただひとすぢにわが身の善悪をかえり見ず、決定往生せんとおもひて申すを他力の念佛といふ」⁽¹⁸⁾と述べ、「問いはく、称名念佛申す人は、みな往生すべしや。答ていはく、他力の念佛は往生すべし。自力の念佛はまたく往生すべからず」⁽¹⁹⁾と言いつつ切っている。さらに「実に我等衆生自力許りにして往生を求めんに取りてこそ、この行等は佛の御心に叶いやすからん。また叶わずやあらんと不審にも覚え、往生も不定には候べき。念佛を申し往生を願わん人は、自力にて往生すべきにはあ

められるという性格をもっている⁽³⁾。自らの機根の低劣さが自覚されればされるほどに、そうした下劣な機根なればこそ、それを救いの対象として常に働きかけている阿弥陀仏への信を一層深めて行くとともに、その自覚が「たすけたまえ」と口に南無阿弥陀仏と称えるという実践的な態度として現れてくるという信仰内実を有している。

乱想の凡夫であっても念仏を相續して行く中で、至誠心・深心・廻向発願心の三心は自然と具足されるとする。乱想の心を静めて念仏を申すという立場ではなく、乱想のままに念仏を相續して行くことが強調されている。「ただ彼佛今現在世成佛 当知本誓重願不虛衆生称念必得往生の釈を信じて、ふかく本願をたのみて一向に名号を唱べし。名号をとなふれば三心のをのづから具足するなり⁽⁴⁾」といわれる。明遍と法然の問答に「ちれども名を称すれば、佛願力に乗じて往生すべしとこそ心えて候へ。ただ詮ずるところおほらかに念仏を申す⁽⁵⁾」ということばにみられるように、乱想のままに念仏することを説き示している。こうした乱想をはじめとする凡夫の習いを次のように述べている。

悪ヲハ、サレハ佛ノ御ココロニ、コノツミツクレトヤハススメサセタマフ。カマエテトメヨトコソハ、イマシメタマヘトモ、凡夫ノナラヒ、当時ノマトヒニヒカレテ悪ヲツクル、チカラオヨハ又事ニテコソ候へ⁽⁶⁾。

つみつくる事こそおしへ候はねども、心にもそみておほへ候へ。そのゆへは、無始よりこのかた六趣にめぐりし時も、かたちはかは

れとも心はかはらすして、いろいろさまさまにつくりならひて候へは、いまもういういしからず、やすくはつくられ候へ⁽⁷⁾。

かなしきかなや、善心はとしどしにしたがひてうすくなり、悪心は日々にしたがひていよいよまさる。されば古人のいへる事あり。煩惱は身にそへる影、さらむとすれどもさらず、菩提は水にうかべる月、とらむとすれどもとられずと⁽⁸⁾。

心のみたるはこれ凡夫の習ひにて、ちからおよはぬ事にて候⁽⁹⁾。

ここに妄念のいかにも思われ候は、いかかし候へき。答、たたくよく念仏を申させ給へ⁽¹⁰⁾。

念仏を申候に、はらのたつ心のさまさまに候。いかかし候へき。答。散乱の心、よにわろき事にて候。かまへて一心に申させ給へ⁽¹¹⁾。

こうした言葉にみられるように、往生を願って念仏するものの、妄念を起こし、悪業を重ねているのが現実であり、こうした現実を踏まえたくて次のように説いている。

又念佛の時悪業の思はる事は、一切の凡夫のくせ也。さりながらも往生の心さしありて念佛せば、ゆめゆめさはりとはなるへからす。たとへは親子の約束をなす人、いささかそむく心あれども、さきの約束改変する程の心なければ、おなし親子なるかことし。念佛して往生せんと心さして念佛を行するに、凡夫なるかゆへに貪瞋の煩惱おこるといへども、念佛往生のやくそくひるかへさされは、かならず往生する也⁽¹²⁾。

九品皆凡を説く善導の説をうける法然は、『選択本願念仏集』（以下選択集と略）第八章三心篇で、至誠心の解釈に当たって観経疏散

口称念仏による変成と念仏者の態度

神 谷 正 義

はじめに

法然上人(一一三三—一二二二・以下敬称略す)の浄土教の特質は、法然自らの宗教的反省と宗教体験に裏打ちされたものであることは言うまでもない。しかし、それらは決して法然個人の宗教的反省や体験のみに終始するものではなく、すべての人間の存在を規定するものであると同時に救済を可能にするものでもある。既に藤堂恭俊博士によって指摘されているように、⁽¹⁾比叡山における仏道修行を通して三学非器なる存在であることの自覚と、その三学非器なる存在としての自己が救われる教えを求め、善導の観経疏に出会い浄土教へ帰入し、念仏を称えるなかで、阿弥陀仏の光明に照らし出されて、罪悪生死の存在であることを自覚する。この二つの自覚のうえに立った浄土教である。

法然自ら自己の存在を実存的に捉え、煩惱具足の凡夫、罪悪生死

の凡夫等々と規定している⁽²⁾。その特徴は善根薄少であり罪悪不善の身であり、心は常に散乱し、三界に流転して火宅を出ず、六道に輪廻して成仏できない存在である。こうした凡夫が念仏を通していかに生死を出離して、浄土に往生できるのか。また念仏を称する事を通して凡夫がどのように内的に変質するのか。といったこととあわせて浄土往生を願う念仏者の態度はいかにあるべきかといったことをどのように説いているかを、法然自らの法語の中に探ろうとするのがこの小論の意図するところである。

一、凡夫の習いと自力・他力

法然浄土教における深心の重要性はすでに指摘されるところであり、深心の内容である信機と信法の関係は、念仏を中心軸とする螺旋階段的関係にあり、念仏を称えるという実践を通して信法が益々深められて行くと同時に、自らの凡夫としての機の自覚がさらに深